

半世紀にわたる「問題」を、いま問い直す。

不登校 50年

証言プロジェクト

#30 山下英三郎さん

学校基本調査で「学校嫌い」の統計が開始されたのは1966年。今年はそれから50年にあたります。学校を長期欠席する子どもは、学校制度とともに常にいました。しかし、現在につながる「問題」として不登校が社会現象化してきたのは、この統計開始以降とも言えます。この50年、不登校は「問題」であり続けてきました。それは、学校、教育行政、精神科医療、家族のあり方、働き方などが、さまざまに問われてきた「問題」だったと言えます。この50年は学校に行かない子どもたちにとって受難の歴史だった一方、親の会やフリースクールなどの市民運動が立ち現れてもきました。いったい「不登校50年」の歴史は何を語るのでしょうか。不登校をめぐる、時代ごとにどんな状況があり、どのように問題とされ、どう対応されてきたのでしょうか。

不登校新聞社では、「不登校50年」を機に、証言プロジェクトを開始し、不登校経験者、親、親の会、居場所・フリースクール、医者、教員、学者、弁護士など、さまざまな関係者の生の声を集め、アーカイブにしていきます。インタビュー・寄稿は、社会的意義を考え、購読者に限定したのではなく、無料で公開します。そのため、プロジェクトは、寄付によって運営します。ぜひ、このプロジェクトへのご支援・ご協力をよろしく願います。

2016年7月15日 全国不登校新聞社

プロジェクトチーム（統括：山下耕平）

関東チーム委員：奥地主子、木村砂織、朝倉景樹、石林正男、加藤敦也、佐藤信一、須永祐慈、関川ゆう子、野村芳美、藤田岳幸、前北海、増田良枝、松島裕之、山口幸子
関西チーム委員：山下耕平、石川良子、貴戸理恵、栗田隆子、田中佑弥、山田潤

#30 山下英三郎さん



(やました・えいざぶろう)

1946年、長崎県生まれ。日本社会事業大学名誉教授。NPO法人修復的対話フォーラム理事長。早稲田大学法学部卒業後、社会人経験を経た後1983年にユタ大学ソーシャルワーク学部修士課程に入学、1985年に同課程を卒業。1986年から埼玉県所沢市において、日本で初のスクールソーシャルワーカーとして実践活動を行なう。また、1987年から2010年まで子どもの居場所「バクの会」の運営に携わる。1997年から日本社会事業大学教員。1999年、日本スクールソーシャルワーク協会を立ち上げた。著書に『いじめ・損なわれた関係を築きなおす』『エコロジカル子ども論』（ともに学苑社）など多数。

インタビュー日時：2017年9月18日

聞き手：須永祐慈、増田良枝、中村国生

場所：山下英三郎さんご自宅（長野県）

写真撮影：中村国生

須永 よろしくお願ひします。山下さんは、さまざま子どもたちと出会ってこられたと思うのですが、その話の前に、山下さんご自身の経歴からおうかがいしてよろしいでしょうか？

山下 生まれは長崎市で、1946年に生まれました。

須永 長崎市内ですか？

山下 長崎市内です。僕が生まれる7、8カ月前に原子爆弾が落ちました。僕の母がいた場所は中心街ではなかったけれども、翌日、何もわからず知人を探しに爆心地に行ったそうです。そのとき僕はおなかにいたので、胎内で放射能を浴びた「胎内被爆児」なんです。ただ、被爆認定は18歳になってからと遅くて、ある日突然、被爆者手帳がきた感じでした。

なんでその話をしたかというのと、その後の人生行動に大きく影響するからなんです。突然降ってわいた胎内被爆児という経験は、僕にとっては現在にいたるまで、体のことや命のことと密接に関わっていま

す。その後、18歳で長崎を出て、東京の大学に行き、1969年に大学を卒業しました。卒業後、とくにやりたいこともなかったたので、鉄鋼関係の商社に就職しました。

増田 大学の学部は？

山下 法学部なんですよ。

増田 法学部で鉄鋼ですか？

山下 そうです。

須永 おもしろいですね。

山下 法学部はただで、法律を勉強したわけじゃなかったんです（笑）。

須永 当時は学生運動の時代ですか？

山下 そうです、全共闘の時期です。1965年、大学に入った年に学費値上げ闘争があって、学生たちが大学を封鎖して、全学ストライキが100日間にわたって続くということがあったんです。だから、そのぶんずれ込んで、2年生になったのは8月でした。田舎からぼつと出てきて大学に入って、いきなりそういう出来事に遭遇したので、そこで少しものごとを考えようになりました。それまでは生き方も迷ってて、あまり先のことには考えてなかった。

大学闘争の影響はすごく大きかったですね。当時、学生たちが言っていたことは、主張としてはまっとうだと思いましたが。同時期にベトナム戦争が激しくなってきたので、それも根が深い運動として、直接は関わりませんでした。いろいろな考えるきっかけになりました。結局、大学4年間は、ずっと大学闘争の時代だったんですよ。

だけど、運動がどんどん過激になって、僕が卒業したころには赤軍派の活動がだんだん活発になる状況でした。大学のなかでも、運動する人どうしが争うのを見て、おおもとの言っていることは同じはずなのに、

入ったら、会社自体ぜんぜん合わなくて……。そのころはちょうど経済成長期で、とにかくイケイケな雰囲気、だけど僕は、学生のように産学協同路線にすごく違和感を覚えていたから、自分の考え方と会社の現実がちがうことにすごく苦しくなっちゃったんです。商社の仕事が苦しくて苦しくて、これはもう続けちゃいけないと思ったんです。

しかも、やる気がないからまったく仕事をせず、出社して朝礼を終えたら、すぐ会社を出て喫茶店でお茶を飲んだり、友だちが営業に行くと、僕もいっしょについて行ったり、ときどきは映画を観に行ったり、友だちといっしょにボウリングに行ったりしてました。

しかし、そればかりだと、ちょっとむなしなと思っただけ、いくらなんでも、会社に迷惑をかけるし、自分もつらかったのだから、辞めようと思っただけ、辞めたところで何をやっていいかわからない。

カメラマンから植木屋に

そういうとき、物を書いたりできないんですけど、

細かいところで対立して、しまいには暴力をふるうようになってしまった。一番衝撃だったのは、連合赤軍の浅間山荘事件と、その直前に起きたリンチ殺人事件です。あれにはすごく挫折感を感じた。そのとき、暴力対暴力では絶対に解決がつかないと思ったんです。ね。

同時期に、アメリカでは公民権運動が始まりました。キング牧師の非暴力主義に、僕はすごく惹かれて、キング牧師のことを研究したとまでは言わないけど、大事なものはこれじゃないかと思っただけです。とはいえ、大学時代には何も考えがまとまらず、とりあえず就職するしかない、鉄鋼関係の商社に行っただけです。

学生時代、アメリカの若者たちが平和部隊の隊員としてアフリカで活動しているのを知って、自分もそういう活動に参加したいという想いがありました。です。英語サークルに入って英会話を学びました。鉄鋼関係の小さい商社で英語ができれば、外国に行けるのではないかと思っただけが就職の動機でした。

だけど、実際には行くチャンスはなかったですね。

カメラだったら何かを表現できるんじゃないかと思っただけです。自分が胎内被爆児ということから、戦争問題を扱って表現したいという思いがあったんです。戦後生まれだけど、僕のなかで戦争の影響はすごく大きかった。それを写真に撮れたらと思っただけ、カメラマンになろうと思っただけです。

戦争というテーマはよかったんですけど、とはいえ、どう表現すればいいかはわからない。それでも、とにかくやってみたいと思っただけです。

商社は半年で辞めて、夜は写真学校に行き、昼間は渋谷の写真スタジオで、無給にちよつと毛が生えたくらいの仕事して、写真をやり始めたんです。

一年半ぐらい経ったころ、自分のなかのテーマが少しおぼろげに見えてきて、サイパンに行きました。当時のサイパンは、戦争の傷跡がまだ生々しく残っていました。サイパンのすぐ横にテニアン島があるんですが、テニアン島から原爆を積んで、長崎・広島に出發したという事実もありました。ある意味、僕にとってのひとつの原点だから、その現場に立ちたいと思っただけ、原爆の格納庫だったところへ行きました。

そこで、サイパンの現実と島人の暮らしを写真に撮りました。いま振り返ると、25歳ぐらいの青年にしては、よく考えてたなと思うんだけどね。その写真を銀座のニコンサロンに出展した。新人が開くには厳しい審査のあるサロンなんだけど、そこで個展ができたんです。まだ写真を始めて2〜3年ぐらいだったのに個展が開けたこともあって、少し舞い上がる気持ちで、ちよつと才能があるかと思つて錯覚しちゃった(笑)。

須永 年代はいつですか。

山下 1972年でした。サイパンでは2カ月ぐらい現地の人の小屋に泊めてもらつて、写真を撮つたんです。そのときに、ちよつと横井庄一^{*1}さんが発見されたんですよ。隣のグアム島でね。

その後、フリーカメラマンとして仕事を始めたんですけど、経験もないし、雇われても人から頼まれ

*1 横井庄一(よこい・しょういち 1915-1997)・・・太平洋戦争終結から28年目の1972年、アメリカ領グアム島で地元の猟師に発見された残留日本兵として知られる。

山下 山手線の恵比寿駅と渋谷駅のあいだに住んでました。それで、写真はなかなか難しいし、都会暮らしで子育てを考えるよりも、田舎で暮らしたいなという気持ちがよくあつたんです。でも、田舎で暮らすには写真にこだわっていてもダメだから、写真をいったん捨てることにした。田舎で暮らすにはどうしたらいいかと考えたとき、自然環境の問題にもすごく興味があつたので、田舎に行けば植木屋さんの仕事もあるだろうと思つて、渋谷に住みつつ、まずは植木屋の仕事に入りました。

中村 どの植木屋だったんですか？

山下 植木屋は元住吉(神奈川県川崎市)にあつて、渋谷から通つてました。それは楽しかったですね。ちよつと同じぐらいの若者がいて、大学を中退したり生き方に迷つてる人がいてね。それで1年半ぐらい住むところを探してうちに三重県の紀伊長島(現在の紀北町)に農家の廃屋を見つけて、そこに移り住んだんです。

た仕事はダメでね。自分が撮りたいものしか撮らないという不器用さがあつて、結局、仕事がぜんぜん来なかつた。でも、アルバイトしながら写真を撮りためていて、写真は自分でもとてもよかつたと思うのね。知り合いになつた写真評論家の人からも評価してもらつたけれど、発表する媒体はまったくなかつた。

僕の写真は声高に訴えるものじゃなく、どちらかと言うと静かな風景のなかで訴えるものが多くて、インパクトがないというか、いい写真なんだけど陽の目を見にくい内容だつたんだと思います。だから、悶々としてアルバイトして過ごしていたんですが、そんなに、オイルショックがきちやつた。

僕は比較的早くに結婚していたので、子どもも72年に生まれていました。写真にこだわっていても生活できないなと思うのと同時に、当時、渋谷駅の近くに住んでいたんですが、東京は公害がすごくて、子育てには向いてなかつたんですね。

須永 渋谷の中心付近に住んでいたんですか？

農村移住、病院事務と転々

須永 東京から一気に移つたんですね。

山下 公害がなくて、海も川もきれいなところでした。

増田 知り合いが誰もいなかったわけですよ。すごいですね。

山下 当時、NHKで「明るい農村」というテレビ番組をやつてました。その番組で、その村に移住した人が暮らしている風景を見て、いいところだなと思つて、その人に「自分も同じように移住を考えているのだけど」って手紙を書いたら、「一度見に来ませんか」ということになって、じゃあ仕事も住むところも探してあげるからという話になつたんです。

増田 なんか軽いですね。

山下 軽いんですよ、ほんとうに(笑)。そうやって三重県で植木屋さんをやっているときに、妻が娘を妊娠しました。住んでたところがすごい山奥で、町の病院に産婦人科があつて、そこに行つて産んだんですね。その院長がなんか僕のことを気に入ってくれて、最初はその病院の植木の手入れをしてくれと言われてやってたんだけど、仕事が終わりそうになると今度は「こつちやってくれ」となつて、なかなか仕事が終わらない。それでも、いよいよ仕事が終了するといふとき、「実は三重県の鈴鹿市のほうに大きい病院を建てようと思ってるんだけど、人を探してる。あんた手伝つてくれないか」つて話をもらつたんですよね。

増田 それで事務の仕事を？

山下 そのころの僕は、地下足袋にサンダラスつて格好で、ちょっと不審人物みたいな感じだったんだけど、そういう人に声をかけるつてことは、新しい病院の庭とか掃除とかの仕事なのかなと思つてたんです。山の中で過ごして一年半ぐらいで、その生活を気に入つて

んでいた紀伊長島と鈴鹿市は100キロぐらい離れているんだけど、週2回ぐらい通つて、事務的な勉強をしたりして、2年間過ごしました。

ある外国人との出会い

鈴鹿市では建売住宅を病院が借り上げたところに住んでいたんだけど、まったく知り合いがいなかった。そこに、あるときスーツを着たアメリカ人がふたり、ドアを叩いて「こんにちは。あなたは神を信じますか？」と来たんです。モルモン教徒だったんですが、「いや、僕は信じないです」と言つたら、でも、話しているかという。僕は学生時代に英語をやつたから、英語をしゃべれる機会がきたと思つて、英語でしゃべつたわけ。そうしたら向こうも、まわりに英語を話せる人がそんなにいなかったから、すごく喜んで、しゃべりよう来るようになったの(笑)。

でも、このまま自分の英語の練習のためだけに続けるのは悪いから、「いろいろ話してるけど、僕はモルモン教徒になるつもりはないので、もう来ないでく

たので、「あまりやる気はないです」と言つたら、「いやいや、そうじゃなくて、病院の運営のスタッフに入つてほしい」つて言うのね。びっくりしちゃつて、そのとき思つたのは、この人はよっぽどのバカか、人を見る眼があるかどつちかだろうと。僕は都合よく考えたので、この人はもしかしたら人を見る眼があるんじゃないかと思つたんです。ちょうど30歳のときかな。人から眼をかけてもらうことなんて、それまでの人生のなかであまりなかったから、だまされてもいいかなと思つてね。でも、いろいろ考えてはいたんです。まだ30歳だし、山の中でずっと暮らすのも展望が開けないかとか、友だちも家に遊びに来ないとか、地に足がつかなかった感じがあつて、これは良くないな、もう一度町の中で、人の中で生活してみるのがいいかなと。それで、僕に仕事や住むところを紹介してくれた人にも相談したら「あなたは若いし、せつかく声をかけられたんだから、やってみたほうがいいよ」つて後押ししてくれた。それで、病院の仕事に入つたんです。病院が建つ前から鈴鹿市に行つて、建設予定の更地に先に住んで、建設のための準備をやつたんです。住

れ」つて言ったのね。でも「モルモン教の話をしていないなら来てもいい。友だちとして来るんだつたらいい」つて言つたら、彼らは、じゃあ休日に来ると言つて、それで仲良くなつちやつたんです。

その後、4〜5カ月ぐらいして、向こうが転勤で別の場所に移つたあとも、次の人たちが紹介されて来て、何人もアメリカ人の知り合いができたんです。

そんななかに、一度帰国してから結婚して夫婦とも英語学校で会話を教えるという人たちがいたんだけど、しばらくしたらふたりとも肺炎になつちやつたんです。彼らはお金がないので、僕が働く病院に入院すればいいと言つて紹介して、入院費もぜんぶタダにしてあげたりしました。事務長が「山下がいいんだつたらいい」みたいな感じで、タダにしてくれたのね。そうしたら、それをすごく恩義に感じてくれてね。その後、もう一組、夫婦が来たんだけど、その夫婦は子どもができちゃつたのね。しかしやっぱりお金がないから、じゃあ、うちの病院で産めばいいと言つて、それもタダにしてあげた。それで、ふたつの家族がすごく恩義に感じてくれて、とても仲良くなつて、うちに

来てご飯をいっしょに食べたり、向こうに行って食べたりしていました。

そんなころ、80年代に入る前、ちょうど校内暴力が盛んとなり、日本では中学校がたいへんなんだよという話をしたら、「アメリカにはスクールソーシャルワーカーという人たちがいて、子どもたちの話を聴いて、いろいろ助けてくれるんだ」っていう話をしてくれたんです。友だちのひとりが高イスクール時代に両親が離婚して自分が乱れちゃったとき、スクールソーシャルワーカーの人が支えてくれて、なんとか持ち直したんだという話をしてくれた。そのとき、それっておもしろいなって思ったんです。日本にはまだスクールカウンセラーもなかったのですね。

須永 じゃあ、そのモルモン教の人たちとのつながりから、次の仕事の話につながるんですか？

山下 そうそう。だから訪問を断らなくてよかった。

須永 ですね(笑)。

くれると思ってね。

それで、アメリカの大学院に行こうかと思ったんだけど、まずは英語の試験を受けなくちゃいけない。TOEFLってやつですね。それまで英語を話すことはあっても、勉強も何もしてなくて、試験の内容を見たらもう無理だと思って、参考書を買っても、捨てはしなかったけど、脇のほうに置いてたのね。一時は断念しようと思ったんだけど、いったん気持ちに火がついたものは止められなくて、TOEFLの試験を受けることにしたんです。マークシート方式だから当たり外れみたいな感じで、同じ問題を何回も何回も練習したら、わりと回答できるようになった。しかも、わからないことはアメリカ人の友だちが教えてくれて、それでTOEFLを受けたら、基準点よりちょっと低かったけど、そこそこの結果になった。そして、アメリカの大学院の入学願書も出したのね。これもアメリカ人の友だちが「書くなら控えめに書くな。成績じゃなくて自分のやる気の問題だ」と言ってくれて、それで「スクールソーシャルワークはこれから日本に必要なと思うけど、まだ日本にはないので、おたくの大学に

ソーシャルワークを学びに アメリカへ

山下 僕は子どものことがすごく好きで、興味があった。でも、子どもに関わると思ったら、当時は「教師」の仕事しか思いつかなかった。僕は教師になりたいとは一度も思わなかったの、そういう仕事は無理だなと思ってただけど、向こうのスクールソーシャルワーカーの話は「それって日本にないし、誰もやってないなら、日本でまた必要になってくるような気もする。おもしろいかな」と思ったんです。そのとき、アメリカ人も軽いから「お前が気がついたんだからお前がやれ！」って言ってね。アメリカに行くなら自分たちがいろいろ手伝うと言ってくれたんです。僕は病院の仕事もやり始め、大事な仕事も任されてただけど、病院の仕事ってお医者さんが中心だから、一生やる仕事じゃないと思っていたところだった。とはいえ、目をかけてくれた院長に申し訳ない。でも、前向きに辞めるんだったら、院長の性格だったらさっさと応援して

行って勉強したい。もし私を入れてくれれば、あなたたちはとてもいいことをしたことになるから」と大胆に書いたんです。

須永 じゃあ、初めからスクールソーシャルワーカーと明快だったんですね。

山下 そうそう。ソーシャルワーカーのことはまったく知らなかったけど、スクールソーシャルワークをやりたいと思ってるね。

自分のことを振り返っても、僕は中学校時代に親と離れてひとりぼっちで、兄弟はいたけど、あまり兄弟とも話ができなくて、進路などもぜんぶ自分で考えなくちゃいけない状況だったのね。そのときに、チャラッと年上の人で相談に乗ってくれる人がほしいな、みたいなことは思ってた。そういうものがどこかにあって、いろいろ迷ったりしてる子たちの支えになれば、みたいなことを思っていたんだよね。

須永 行った大学はどこですか？

山下 モルモン教徒が多いユタ州です。僕が知り合った人たちもユタ州から来てたから、「ほかのところには行くな、ユタに來い」って言ってくれて、住むところも手配してくれたんです。

須永 それはある種、布教活動でもあるのかな(笑)。

山下 (笑)。彼らは布教なんかまったくやらなかった。家族も僕がめんどうみたときにすごい恩義を感じてくれてたから、家財道具もみんなお膳立てしてくれて、それで رفتんです。1983年のことだったかな。

須永 その後、何年間行かれたのですか？

山下 修士課程の2年間、勉強しました。僕は福祉の勉強は何もしてなかったから、2年間じゃまったく足りなくて、ほんとうはもうちょっと勉強したかったです。勉強したければ博士課程だということになり、ユタ州の隣のコロラド州の大学を受験して合格した。

でも、お金がなくて、奨学金とかを探したけどダメで、結局は2年間で帰ってくるようになりました。

須永 家族も全員？

山下 いっしょに。でも、帰ってきてても、仕事も住むところもなかった。また軽い考えだけど、海があつて山があるところがいいなと思っていたので、小田原のあたりはいいよねとなって、小田原に住み始めました。

須永 ちょっとだけ戻りますが、スクールソーシャルワークを学んだユタ州の大学では専門はどういう部類だったんですか？

山下 スクールソーシャルワークを学んだわけじゃなくて、高齢者も含めたソーシャルワーク全般のことを学んだんです。スクールソーシャルワークについては、専門のコースはミシガン大学にしかなかったんですね。子ども関係の授業を選びながらやっていた感じで、それが結果的にはよかったです。

向こうの大学院は、論文を書かなくても、研究・調査したペーパーを出せばいいんです。でも、僕はアメリカにわざわざ来たのだからと思って、修士論文を書くことにした。そうしたら、大学院に60人くらいいるなかで、論文を書くのは僕だけだったんです。それは4〜5年ぶりのことだったらしくて、先生たちがすごく喜んで応援してくれてね。僕は、えこひいきされたことってなかったんだけど、その先生たちには結果的にえこひいきされたかな(笑)。

書きあがった論文に対しては「ディフェンス」と言って、質問を受けて答えなくちゃいけない場があるんだけれど、僕は英語がそんなに堪能じゃないから詰まったりすると、その先生たちが「彼が言いたいのはこういうことなんだ」って応援してくれた。

スクールソーシャルワーカーに

須永 その後、小田原に移ってきたと。

山下 小田原に住みました。3カ月仕事を探したけど、

もうそのときは40歳。どこにも雇ってもらえなくてどうしようかと思つて、いろいろ探しているうちに、予備校の講師の口が見つかった。予備校に雇われて、その年の12月から講師というより職員として教えてたのね。それで、仕事に慣れるか慣れないうちに、次の話がやってきました。翌年1月の中旬ぐらいに、埼玉県の所沢市教育委員会から「相談員」の口があるから、あなたがアメリカでやっていたことをやってみないかって声がかかったんです。

中村 きっかけは、どういうことだったんですか？

山下 僕の勝手な思いでアメリカに行つて、誰もスクールソーシャルワーカーをやれとは言つてないし、人がどう思うかわからないし、日本人がスクールソーシャルワーカーについてどう思うかを調査したかったです。そこで、友人のひとりが教育委員会とつながりがあったのを思い起こして、彼に口をきいてもらおうと思つて話しておいたんです。参考にアメリカで書いた研究論文を日本語に書き直して送っておいたんで

すね。そうしたら、教育委員会は当時、学校が荒れていて、どうしたらいいかわからない状態だった。そして、帰国した年末に、あの人は日本に帰ってきてるよという話になって、「口があるんだけど」って話になっていったんです。

予備校の仕事も、すぐ辞めるとなると困っちゃったんですけど、すごいチャンスなので行くしかないかなと思っただけです。そこで意を決して「入ったばかりで、ほんとうに申し訳ないんだけど辞めさせていただけないか」と予備校の人に言ったら、「あなたが一番やりたいことだと思うから、それはぜひやったほうがいいです」と言ってくれました。そのうえ、所沢市は非常勤で12万円しか給料がないと知って「それじゃ生活できないでしょう」と言って、「非常勤は毎日じゃないだろうから、空いてる日は予備校で講師やれば補足できるよ」と言ってくれたんです。運がいいことに予備校が所沢にもあった。そこで僕は、横浜と所沢の予備校に週2日勤めて、あとはスクールソーシャルワーカーの仕事をするかたちで、なんとかぎりぎりの生活だけど始めることにした。予備校の人たちの配慮はほ

じやなかったんだけどね。スクールソーシャルワーカーという名前は、正式な職名としては教育委員会もOKしない。だから所沢市の職名はそれでいいとして、対外的には私はスクールソーシャルワーカーを名乗らせてもらうことにしたんです。やはり知ってもらうのが必要だったからね。教育委員会も給料がすごく安いのが後ろめたかったのか、それは大丈夫ということになって始めたんです。

とはいえ、ほんとうに僕が大胆だったなと思うのは、それまで不登校の子とひとりも会ったことがなかったんですよ。しかも、ひきこもっている子を訪ねるわけですからね。よくやったなと思います。

須永 いままでの経歴を聞けばそうですね(笑)。

山下 それから、つっぱってる子とも、つきあいがなかった。それなのに、いきなり最初の年から15〜16人を担当したんです。最初はつっぱってる子が多かったかな。つっぱってる子のなかでも、市内では番長クラスとか、そういう子たち……。でも、それ自体はあん

んとうにありがたくて、いまでも感謝してます。そして1986年4月から、スクールソーシャルワーカーとして仕事を始めることになりました。

最初は校内暴力に関心があって、その子どもたちの支援だと思っていたんだけど、教育委員会から不登校の子どもたちがかなりの数いるということを知られました。しかも、不登校で家にひきこもってる子たちが、今ほどではないものを知って、だったら親も学校も、子どもたち自身もどうしていいかわからないだろうと。その子たちにも支援をと思ったのね。

とにかく、僕自身が子どもたちと直接関わりたいと思っていたんだけど、つっぱってる子や不登校の子がこちらに会いに来るわけでもないから、家庭訪問して子どもたちとコンタクトをとることを考えて、そういう方法にしたんです。だから最初の職名は「訪問教育相談員」という名前でした。

須永 訪問教育相談員。

山下 訪問教育相談員という名前は、僕としては本意

まり不安じゃなかったです。

相手が自分を育ててくれた

須永 それでどうしたんですか？とにかく会って話を聞いたんでしょうか。

山下 最初は会ってくれないことはあったけど、僕は自分に力がなくても、親とか子どもたちが、自分をソーシャルワーカーとして扱ってくれるという思いだけはあったんですよ。それはアメリカでの実習経験が大きくて、ソーシャルワークの「ソ」も知らないでアメリカに行ったんだけど、いきなり実習をさせられたんですね。週に2〜3日、しかも日本だと指導者がそばにつきつきりだけど、向こうでは、いきなりたいへんなケースを受け持たされるんです。とくに、ある女の子はしょっちゅう家出する子で、里親先を探して、家に帰すかどうかについて、僕が関わりながら判断してはいけなかったんです。その子は里親のところも飛び出してしまったので、警察に行ったり、青少年裁判

所に行って捜索願いを出したりと同時に、僕自身がソルトレイク市内を探してまわりました。その子の親戚の家に行ったりね。何も知らないで動いているんだけど、行く先々では、ちゃんとひとりのソーシャルワーカーとして扱ってくれて、そのうち自分でも、なんとなくソーシャルワーカーらしい振る舞いになっていく感じだったんです。

だから、あらかじめ自分がこうでなくちゃいけないとか思ってたなら、僕は所沢でも仕事ができなかったと思います。アメリカでいくつかのケースを担当したとき、相手が自分をソーシャルワーカーにしてくれたという体験があった。その気持ちがあれば、日本でもそんなにずれないでやっていけるんじゃないかと思ってたので、あまり不安じゃなかったんですね。

でも、最初にその感覚と現実がずれてたら、たぶん続いてなかったと思います。あとになって、そこそこの関係ができて、保護者ともいい関係ができてきたときに、まあ自分の感覚はそんなにずれなかったかなと、思うようになりました。

みたいなことはありましたけどね。服装も楽な格好で訪問してました。

須永 ああ、背広を着るとかじゃなくて。

増田 最初からアメリカに行かれて学ばれたのがよかったんですかね？

山下 かもしれませんね。

須永 アメリカの感覚は、また関係性がちょっと違いますもんね。

山下 ちがいますね。アメリカは対等に関わるでしょう。日本では、こういうものだとかたががあつたら、それにとられる。専門家だから、みたいにね。

子どもの居場所を

須永 そこから本格的に子どもに関わっていくわけ

須永 そのころはスクールソーシャルワーカーみたいな存在はいなかったから、親の方からすると、むしろ相談できるって感覚があつたんですかね？

山下 そうかもしれないですね。しかも、僕は小さい親を責めるようなことはしなかったからね。

中村 専門職ながら、上から目線じゃない関わり方ですね。

山下 そうですね。

須永 最初は行政から相談員が来るとなると、かなり抵抗感があつたんじゃないですか？でも、そこはちがつたという……。

山下 家庭を訪問するときは、かならず家庭の了解を得ることが大事ですね。僕は、学校からの依頼だけで動いてはダメだということを前提にしました。それでも、何かわけのわからん人を紹介されて来られた、

すね。その後は、子どもの居場所である「バクの会」の立ち上げにも関わっていかれるわけですね。

山下 スクールソーシャルワーカーを1986年に始めて、ひきこもってる子たちと会っていくうちに、ちょっと元気になってきて、家から出てほしいみたいな感じになってくる子たちもいたんですね。そこで僕は無責任に、「別に悪いことをしてるわけじゃないんだから外に出てもいいんだよ。人から、なんで行つてないのって聞かれたら、今日は休みですって言えばいい」とか言つたのね。だけど、実際には行くところがない。行くところがないのに、どこに行つてもいいよと言うのも少し無責任な話だなと思つて、そういう子どもたちが行ける場所があるといいなと思つて、1年後の87年にバクの会を始めました。

87年の秋ごろ、地域で子どもたちの勉強会をやっているグループがあつて、そこに呼ばれたんです。そこでいろいろ話して、最後に「不登校の子たちのなかに学校以外だつたら行ける子たちもいる。そういう場所ができたらいいなと思つてるんですよ」と話したら、

その後、バクの会の代表になった滝谷美佐保さんが「実は私たちもそういうことを思ってたんです」と言うので、いっしょに始めることになったんです。

増田 そこがひとつの出会いだったんですね。

山下 それで「いっしょにやりましょう」と言ったら、ちょうど折よく、そのとき参加していた人が「私、塾をやってるんですけど、使っていない日があるのでどうぞ使ってください」とおっしゃってくれたんです。

何も計画がないのに場所を見に行き、新所沢駅から近いし、ここは使えるということになって、とりあえず始めちゃおうということ、最初は週1回ぐらいからスタートしました。それが87年の12月でした。その後は、教育委員会の仕事とバクの仕事を並行しながらやってきました。最初はかなりバクに関わってましたけど、途中からはあんまり行けなかったですね。

須永 最初から、子どもはたくさん来たんですか？

したい気持ちを持ってくれたようで、ずいぶん助けてもらいました。そこでは、それから3〜4年ぐらい続けました。その後、その土地も売却されてしまったので、また、その方が「じゃあ、ほかのところはどこがいい？」と持ちかけてくれて、所沢駅近くの料亭だった物件を使うようになりました。

恵まれていたのは、場所代がまったくいらなかったことです。最初の方も、「せめて光熱費だけは受けとってください」と言っても、「絶対いりません」と断られたんですね。その後のふたつは、光熱費は自分たちで払ってたんだけど、場所代がいらなかったのがすごくよかったです。スタッフも全員ボランティアで、僕らも会費を払ってたので、費用はとて低くおさえられました。

須永 会費はいくらだったのですか？

山下 1カ月1家族2000円です。それはスタッフの人件費と場所代がいらなからできていたことですね。

山下 最初は、僕の関わっていた2〜3人が来たぐらいで、「ほかの子たちも来るといいね」と言ってくらい、むしろ大人のほうが多かったんです。そこで、あんまり人待ち顔しても楽しそうな雰囲気じゃないから、大人が楽しもうって僕が言って、大人どうして遊ぶようになっちゃって、その雰囲気もあったのか、人が来るようになりまして。それで週1日から週2日、3日、4日と、どんどん活動が増えていきました。

7〜8年後、その場所が使えなくなって困ってたところ、先ほど話した教育委員会に口をきいてくれた友人の父親が不動産屋をやっている相談に乗ってくれたんですね。分厚い地図を出してきて「このこと、このこと、ここが空いてるけど、どこがいい？」って言われて、それで航空公園駅の近くの40坪ぐらいの空き地を選んだんです。空き地だから自分たちで廃材を集めて建てるかなと思っていたら、「プレハブでいいんだったら建ててあげるよ」と言って、建ててくれたんです。

その人は市長だったとき、自分が市長としてスクー ルソーシャルワークのことをあんまり手助けできなかったという気持ちもあったみたいで、側面から応援

須永 バクの会は、その後、いつまで続けておられたでしょうか？

山下 2010年まで23年間やりました。閉じざるを得なかった理由のひとつは、スタッフの高齢化ですね。僕が一番若いぐらいの感じだったので、みんな60歳を過ぎたところから、家族のいろんな事情が出てきたり、体力の自信がなくなってきたりしてきた。それから、場所代がずっとタダだったんだけど、協力してくださった方の経営していた不動産屋が財政的に厳しくなっちゃって、場所代を払わなくちゃいけなくなっちゃったんです。月額20万円ぐらいで、それはちょっと大変だとなって、会費の値上げも考えたけど、値上げして人が来る目算もないし、2000円でやってきた僕らの思いもあって、やり方を変えるのは本意じゃないから、いったん閉じることにしたんです。

そのとき、僕は関わってくださった方に「ここで閉じたからといって、すべてゼロになるのではなく、自分たちがやってきたことは、別の場所にきつと引き継

がれていくはずだから、終わったと思う必要はないんじゃない」と言いました。実際、バクの会を閉じたあとも、ほかの場所で居場所をやったり、関わったりしてる人たちもいるし、バクもそのなかでいろんな活動があったので、それが別なかたちで続いてたりするの、すべて終わるわけではないと、自分たちをなくさめながら閉じた感じでしたね。

須永 発展的閉室ですね。

子どもを傷つけない専門家を

増田 所沢市の教育委員会との関係はいつまでだったのですか。

山下 教育委員会と離れたのは、10年以上やってからでした。離れた理由はふたつあって、ひとつは僕は40歳から始めたので、教育委員会もいろいろ考えてくれて給料をけっこう上げてくれてはいたのだけど、子どもがふたりいて生活が成り立たないこともあって、

そうしたら実際に声がかかってきた。

増田 売り込まないで？

山下 そう。でも、つながりはあったんです。スクールソーシャルワークをいっしょにやってきた仲間の友だちが社大の先生をやっていて、その友だちに少し話をしたことがあったんです。そうしたら、ひとり教員が足りなくなったときに声がかかったんです。

須永 社会福祉学部ですね？

山下 学部ではなくて、社会福祉士を養成する社会事業学校というのがあったんです。その教員として社会福祉援助技術を教えることになったんです。すごいタイミングがよかった。でも、面接に行つて当時の校長に「うちは給料安いですよ」って言われちゃって、「えー、生活苦しくて仕事変わるんだけど、でも、ほかの先生たちも生活してるから、そんなにひどいことないのかな」と思いつつ、その人は盛んに「うちは安

せっぱつまった気持ちがあったこと。もうひとつは、相談を受けていると、「専門家」に傷つけられた人がすごく多くて、あそこでもここでも傷つけられたとか、ひどいことを言われたという話をたびたび聞いていたんです。楽になりたくて相談した先で、ひどいことを言われて落ち込んで帰ってきている。それではまずいと思ったんですね。そういうことは、人を支える活動につく専門職が一番やってはいけないことだから、そういうしないためのメッセージを発していきたいという思いも、強くなってきたんです。それで、これは冗談でよく言ってたんですけど、一番近いのが社会事業大学だったから、「社大から、そろそろ声がかからないかな」と（笑）。

須永 期待してたんですね？

山下 そうそう。物理的に近かったしね（笑）。また、厚生労働省が関係する大学だから、そこでスクールソーシャルワークをやれば、ちょっとは影響があるかなと、根拠のないことなんだけど、そう思っていて、

いですから」って言うので、すごく不安でした。

須永 安かったですか？

山下 いや、僕にとっては高かったの。でも、4月に給料明細もらうまで怖かった（笑）。

中村 それまでわからなかったんですか？

山下 そうそう。

増田 聞かなかったんですか？

山下 聞かなかったね。

須永 大学は年俸制のところもありますよね。そういう相談がある場合もあると思いますか？

山下 それが普通だと思います。それで最初に給料の明細書をちらっと開けてみたら、僕からしたら「あ

れつ、いいじゃん」みたいな……(笑)。

須永 校長からすると、年収1000万円とか1200万円とか、そういうイメージと比べて言っていたんでしょうね。

増田 そのころ、私は山下さんから所沢市からこんな紙切れが来たって見せていただいたことがありました。「あなたを二度と雇いません」みたいな書類でしたけど、あれはなぜだったんでしょう。

山下 社事大に職が決まったとき、まだ中学2年生や小学校6年生の子と関わっていたんです。社事大に行っても、この子たちが卒業するまで、あと1年は関わろうという気持ちがあったんです。最初、所沢市のほうには1年間は並行してやらせてくださいと言っていて、いいという話だったんです。でもなぜか、途中からダメと言い始めて、それはおかしいじゃないかと。それまではケンカひとつしないうえに、そのときばかりは怒って、所長に文句を言って、所長では埒が

あかないので教育長に直談判しました。そのときはほんとうにケンカ腰な感じで、僕の関わってきた親御さんたちもすごく怒ってました。親御さんたちが大挙して教育長のところに行つて、さらには市長にまで「山下さんを辞めさせるな」と言つて、そういうふうになつていった。だから教育長としてはトラウマというか頭にきたようです。それで、いちおう1年間はOKだけど、その後は二度と雇いませんというめずらしい辞令が来たんです。それは僕にとっては誇りで、子どもや家族の側に立ってきた証だと思つて、いまでも大事に取つてあります。

周囲の評価より子どもの思いを

中村 出会ってきた子どもたちには、どんな子どもたちがいらつしやつたんでしょうか？

山下 プライバシーのことがあるから、そのへんを多少配慮して話すことにしますね。えーっと、たとえば、ある不登校の男の子を家庭訪問するようになって、す

ごくいろいろ話をして、コミュニケーションも関係も、ものすごくよかつたんです。それで、例のごとく「元氣になってきたから、表に出て散歩なんかすると気晴らしになっていいよ」みたいな話をしてたんです。それで、近所の公園によく行くようになったら、その公園はたまたまツッパリの子たちの居場所だったのね。その子たちは暴走族だったんだけど、彼らと仲良くなつて、そこに入ると言い始めちゃつた。それで僕も、率直に「けっこう上下関係が厳しい世界だよ。海外生活が長かった君なんかには絶対合わないと思う。辞めろとは言わないけど、よく考えたほうがいいよ」と言つただけど、「でも、俺はいいんだ」つて言つて、暴走族に入ったんです。

それまでは家出もしなかつたんだけど、家出はするし、髪も染めて派手になるし、特攻服は着るしで、外から見るとひどくなつていく。でも、そういうときも、僕とは会つて話をしてるし、僕との関係はよかつたと思うんだけど、傍から見ると、あれよあれよという間に変わつていつちやつた。親から見ても学校の先生から見ても、何の効果もないと思われてしまう。僕自身

も、この仕事に向いてないんじゃないかと思つて、辞めたほうがいいんじゃないかなとも思つたんですよ。

増田 その子は仲間ができてうれしかつたんですね。

山下 そうそう。僕はソーシャルワークを始めて4年目ぐらいだったんですが、この子が卒業したら、もう辞めたほうがいいかなと思つてたんです。

あるとき、その子の顔が腫れて「どうしたの?」つて聞いたら、「族抜けるつて言つたら、ランチされちゃつた」つて言う。僕が「ほーら、言つたとおりじゃない」つて笑つたら「山下さん、そんな笑わないでよ」みたいな感じで言われてね。その後、族を抜けて行動も少し落ち着いてきたんだけど、学校にはあまり行かない状態だった。進路もいろいろ相談してただけど、本人はどことも選びたくないつて感じだったんですね。

よく失敗例とか成功例を聞かれるけど、誰から見てもこれは失敗というか、うまくいかなかつた事例でしょう。自分の力量のなさだと思ひました。

この子との最後の面接の日に、いちおう中学を卒業

したら会うのは終わりということで「ごめんね。おじさん、こうやって君と1年半ぐらいつきあって、いろいろ話もしたし、できたと思ってたけど、君にとつて力になれなかった。それはほんとうにごめんさい」と言つて、謝つたのね。そうしたら、その子は「山下さん、そんなこと言わないで。俺は山下さんがいてくれたことで、どれだけ救われてきたかわからないんだよ」つて言ってくれて、僕としては、いい意味でごくショックを受けました。それまで、親の評価や教育委員会の評価は、あまり気にするほうじゃなかったんだけど、ときには、ちらちら頭にチラついて、世間の評価も気にしてただけで、その子とのがきつかけで、とにかく子どもがいって言えばいいんだと、思いきってやっていこうと思ひ直して、自分にふんざりがつくまでは続けようという気持ちになったんです。ですから、その子との出会いはすごく力になっています。いまでも、その子のことは、ときどき思い出しますね。

須永 その子はいま、どうされてるんですか？

んだという感じだった。僕自身が大人たちから言われたのも「君は若いからだよ」とか「そのうち年をとればわかるよ」みたいなことだった。それには、すごく不全感があったのね。言ってる内容じゃなくて、年が若いからダメだという感じがあつて、ちがうかたちに持つていかれることに、すごく不満があつた。

だから、ツッパリの子どもたちが話題になつていた時代、子どもたちなりに言い分があるはずだとは思つたんです。それは彼らの声を聴かないとダメだよつていう思いがすごくあつた。自分が聴かれなかった思いがあるから、僕が子どもたちの話を聴きたいと思つた。

そして、聴いたことはきちんと大人に届けたかつたんだよね。その思いは、いまだに一貫して変わりません。ツッパリの子どもたちだけではなくて不登校の子どものたの言葉も聴きたかつたから、まずは直接会いに行つた。そこで子どもたちの声を聴き、そのうえでどうしたらいいかをいっしょに考えていくことが基本なんだと思います。大人のやることや大きいところがやることは、常に当事者のニーズとずれているから、そこを埋め合わせないとならないんだよね。当事者側の声や

山下 親御さんとは年賀状のおつきあいがあるんだけど、本人とはないんですね。かなり早く結婚したみたいですよ。高校も結局は行かなくて、仕事は何やってるかかわないけど、親御さんから、元気にやっていますという知らせはきてます。

子どもの声を社会に

須永 山下さんは子どもとじかに接しながら、一方で社会の見方に対してもアプローチされてきましたね。子どもの目線と社会の目線には相当なギャップを感じてこられたのではないかと思うのですが、そのあたりはどのように感じてこられたでしょうか？

山下 僕にとって大学闘争の経験は大きくて、あのころ、学生たちの主張は正しいと思つただけで、それが社会を大きく変えるまでにはいたらなかったんだよね。結局は学生どうしの内輪もめで空中分解した。当時の世間の見方は批判的で、若いくせに何を言つてる

思いをきちんと聴いて汲みとらないかぎり、何をやってもびつたりくることはないと思つています。子どもと関わる大人は、もう少し知恵や洞察を深めていかなければいけないと思います。でも、それは当時から現在まで、残念ながらずっと同じだよな。

須永 いま悩んでいる人たちに話を聞くと、基本的に30年前と同じような話が出てきますからね。

親の会とのつながり

中村 登校拒否を考える全国ネットワークや東京シユーレとのつながりは、もうそのころにはあつたんですよね？ どういうきっかけだったんでしょうか。

山下 一番最初は、僕是不登校のことを何も知らなかったんだけど、途中で東京シユーレ代表の奥地圭子さんを知りました。最初は何か怖そうみたいな感じがあつただけ(笑)、文部省(当時)で、学校不適応対策調査研究協力者会議が開かれてね。

須永 1989年ですね。

山下 その会議でヒアリングがあって、そこに奥地さんと僕が呼ばれたんです。それで奥地さんから連絡があって、「ちょっと打ち合わせしませんか？」というので会ったのが最初でした。それで、僕や奥地さんがヒアリングで話したことが、92年の最終報告「登校拒否ほどの児童生徒にも起こり得る」という言葉につながるんだよね。

須永 奥地さんは、山下さんのことをあらかじめ知ってたんでしょうかね。

山下 朝日新聞の夕刊1面トップに「30代まで尾引く登校拒否症」という記事[※]が出たじゃない。あの記事

*2 登校拒否は早期に治療しないと30代まで尾を引き無気力症になる、カウセンシングだけではなく複数の療法が必要という稲村博さん(精神科医/1935-1996)らの研究グループの見解が朝日新聞(1988年9月16日)夕刊1面に掲載された。

山下 朝日新聞の夕刊記事に端を発した、抗議集会が開かれましたね。僕は、一番最初の集会には行ってないんですが、そのあとの会に参加するようになったんです。

須永 90年に登校拒否を考える各地の会ネットワーク(現在の登校拒否・不登校を考える全国ネットワーク)が立ち上がってますね。私は91年秋から東京シユールに通い始めたんですけど、その年の夏、宇都宮で開かれた夏合宿には参加していて、山下さんがゲストで分科会などに参加されていたのを覚えてます。

山下 シユール関係の行事には、けっこう行ってましたね。

須永 自然に関わりが増えていったんですね。

山下 親の会の全国合宿には、毎回のように行くことになりました。でも、そのことは僕にとっても助かった

に対して、同じ朝日新聞の「論壇」に僕が反論を書いたんです(1988年10月24日)。

須永 じゃあ、すでにけっこう発信されていた時期でもあった？

山下 まだ始めたころだろうね。スクールソーシャルワーカーっていう肩書きがめずらしかったから、ちょこちょこメディアに紹介されたりなんかはしてました。

中村 僕が学生するとき、朝日新聞の記事に顔写真が載っていたのを拝見しました。

山下 当時、朝日新聞がよくとりあげてくれて、バツクに誰かついてるんですかみたい言われたこともありました。

中村 そのあたりから、親の会の全国ネットワークにつながったんですね？

ことでもあるんですね。スクールソーシャルワークといっても、当初はたったひとりだけでやってたんですね。まわりに少数の理解者はいたけど、不登校に関してはスクールソーシャルワークというよりも、山下英三郎個人としての不登校観みたいなものがあるって、親の会の人たちには、そこに共感してもらっていたように思っています。その人たちが、僕にとってはとても支えになっていて、大きな力になってました。

須永 山下さんから見て、親の会については、どのよう感じておられたのですか？

山下 親御さんたちの話に教えてもらうことがいろいろありました。当事者の声を聴くことが大事だということを含めてね。どちらかというと、僕がみなさんにお世話になった感じがすごくあるんだよね。だって、僕は孤独なソーシャルワーカーで、バックボーンも何もない。そこからつながれたことだから、ありがたかったですね。

増田 それは山下さんのお人柄もあった気がします。

須永 80年代以降、不登校の市民からの動きがいろいろとあったと思いますが、その先で社会が変化したところ、逆に変化していないところは、どのように見ておられますか。

山下 表面的にはずいぶん変わりましたよね。当時は、登校拒否なんて知らない人が多くて「えっ、登校拒否」と引いた感じだったけど、いまは誰に聞いても不登校を知っているし、偏見の度合いも軽くなっているとは思いません。

たとえば、僕は大学で教えていたけども、社事大でも最初のころは、言葉には出さなくとも学校に行かなくちゃダメだと思ってる学生たちが少なからずいた。まだ根本的なところは変わってないけど、不登校という言葉は社会に広がったかな。発言する人もけっこう増えたし、僕が言っても新しいことはないと思って、この7〜8年ぐらいは、あまり不登校をテーマにした講演はしてません。だけど根本的なところは変

まだ変化していないということですね。

山下 僕はそれが本音とはあまり思えないんですよね。本音だったら、欠席日数をカウントしなくてもいいような気もするし。ほんとうに根本的なところを変えられるのかどうか。根本の見方は、社会の影響や経済効率といっしょになったものからきてる。効率主義などから外れるのが不登校だから、そういった基本的な社会構造が変わらないと、なかなか変わらないんだと思うと思いますね。逆に言えば、不登校というのは、そういうところをはらんだ問題だから、僕はすごく大事だと思うし、言葉ではなくて、不登校という行動で違和感を示していることは、非常に意義のあることだと思います。

須永 たとえば90年代には、ある意味では不登校の社会的な認知度が上がっていき、フリースクールも少しずつ知られるようになっていたように思います。しかし2000年ごろには、いろんなところで「バックラッシュ」が言われるようになり、不登校に対しても早期

わってないから、最近はその根本的なところでは自分に言えることもあると思うようになって、講演の要望があるかぎりは行かせてもらおうかとも思いはじめるところです。

増田 大事です。ぜひ。

問題行動ではないと言ってくれど

中村 いまおっしゃった「根本的なところ」とはどういうところですか？

山下 不登校に対する否定的なまなざしですよ。昨年、文科省は「不登校を問題行動と判断してはならない」という通知を出したけど(2016年9月14日「不登校児童生徒への支援の在り方について」、そもそも、毎年、欠席日数の統計をとっていること自体、基本的には問題視していることでもあるものね。

中村 問題行動じゃないって言ったけれども、実態が

発見・早期対応などの動きがありました。そのころ、山下さんも、雑誌などで対談されたり、いろいろ発信されていたと思います。そのころと現在とのちがいは、何か感じられますでしょうか。

山下 バックラッシュによって「甘やかすのはいけない」「みたいな考え方になったけど、それが効かなくなってきたのが現在じゃないかな。あのころは、学校現場でも無理してでも行かせよう、学校復帰させるための努力をしなくちゃいけないというような空気があったように思います。いまはそうは言ってもヌカにクギみたいなので、現実がもっと先を行ってる感じはしますね。いま強硬策を出しても「それでどうなの?」「みたいな感じになっちゃうんじゃないかなと思います。

須永 それは何が、誰が変わったと思われませんか？

山下 やはり子どもたち自身が変えてきてるんじゃないかな。どんな対策をしても、ちゃんと毎年12万人以上が学校を休み続けることの重さがある。しかも、

その子たちはいま、確実に生きてる。ひとりひとりいろいろな葛藤があったとしても。不登校の数は毎年積み重なってるわけだから、その数の力というのは、無言の、無形のメッセージになってるんじゃないかと思えますね。

増田 国家が考える教育は、絶対に100%の子どもが歓迎するわけではなく、一定数のNOという集団があるということですよ。

山下 そうですね。しかも、フリースクールなどができてきて、すべてが望ましいものとは言えないもの、いろんなバリエーションもできている。以前は学校復帰しかなかったのが、フリースクールに行ってもいいぐらいのところまでは変わってきてる。

増田 もっと深い意味がフリースクールにはあると思うんですけども、何か浅い理解が進んでるっていう危惧はあるかもしれないですね。

しようとなるのも、ただ休んで家にいたらダメみたいなことになりかねないですね。存在そのものを肯定するための選択肢ではなく、何か「する」ことの選択肢でしかない。人間のあり方に対する捉え方が、まだ皮相的というか。人間が存在している、「ある」ことの意味まで捉えたうえで不登校を考えられると、不登校の問題は、そんなに重大視しなくてもすむようになると思えますね。

協会の立ち上げ

須永 さて、その後、山下さんは日本スクールソーシャルワーク協会を立ち上げられますね。その流れや動きを聞かせていただきたいのですが。

山下 日本スクールソーシャルワーク協会は1999年に設立したんですが、その前から、勉強会を開いていました。89年から90年ごろからJOOJOという名前で月1回東京で開いていたんですね。

中村 根っこが変わらないで、フリースクールは不登校の子を受け入れる受け皿という認知のみにとどまっている……。

須永 山下さんがおっしゃるように、世の中の空気が変わってきた部分はあると思うのですが、表面的だなと思うのは、とにかく自殺するとか、ただそれだけを言うような論調もまだ強く、一方では、世の中ではまだまだ「こうすべき」という価値観も根強いですし、自殺するなというのも短絡的なメッセージにとどまっているようにも思えます。もっと深い問題があるにもかかわらず、なかなか掘り下げられる状況になっていない感覚を覚えています。

山下 やっぱ、芹沢俊介さん（評論家）の話じゃないけど、「する」と「ある」のちがいで、何か「する」をしてないとすごく不安な人が多いですよ。そこに人が「ある」ことの意味や捉え方を社会的に共有することは、なかなか難しいのかな……。

たとえば、不登校したらフリースクールに行きま

須永 JOOJOですか？

山下 はい、ローマ字でJOOJOと書いて、「じょじょに広げていこう」という思いもあって。その母体は、88年から週1回、朝日カルチャーセンターで開いていたスクールソーシャルワークの講座の受講者たちでした。その方たちのなかで、講座を受けただけで終わらず、もっと勉強したいという人たちが何人か出てきて、では勉強会を、という話になって月1回、いろんな人を招いて勉強会を始めたんですね。

その後、まだスクールソーシャルワークは根づいてはいないけど、そろそろ組織的な人たちをつくったほうがいいのでは、という話になったんです。理由は、国際スクールソーシャルワーク会議が、初めてアメリカで開かれたことでした。そこに参加するには個人よりも団体参加がいいという話になって、団体を立ち上げる流れになったんです。そのころ、日本では、まだスクールソーシャルワークがどうなるかは、見通しがまったくつかない状況だったんですね。

須永 法人格は取ったんですか？

山下 4〜5年経ってからNPO法人にしましたが、最初は一般の団体でした。わりと細々とやっていたところに、2008年に文科省のスクールソーシャルワーカー活用事業が始まりました。だけど、私たちの協会と文科省の動きとは、あまり直接は関係ないかな。

急激に動いた行政

須永 文科省はなぜスクールソーシャルワーク活用事業に動いたんですかね？

山下 文科省が率先して進めたわけじゃないんです。ね。財務省の当時の担当官が（僕は直接知らないんですが）スクールソーシャルワークに興味を持っていて、これまでの文科省の対策はぜんぜんうまくいってないので、もっとちがったことをしてくれという流れがあって、スクールソーシャルワーク活用事業に、いきなり予算を15億円つけたんです。

その後、財務省の働きかけがあって、2008年に突然導入した。でも、導入するなら僕のところの一言ぐらいあってもいいじゃないかと思って（笑）、文科省に連絡をとってみたんですが、文科省も「実は私たちが予算がついちゃって、困ってるんですよ。何をしたいかわからないので助けてください」という状態でした。

だから、最初の立ち上げのお手伝いみたいなことはしたんだけど、中心になったのは僕ではなく、スクールソーシャルワークに関係のない人で、家庭裁判所の調査官だったことがある人だったんです。文科省のスクールソーシャルワーク担当の人たちは法務省からの出向なんです。そういった関係で、その人が中心的な役割を担うことになったんでしょうね。

須永 もともと流れがちがうんですね。

山下 そう。だから文科省の本流ではないんです。ね。最初は15億円も予算がついたから、いろんな自治体から申請を受けつけて、選ぶところで僕もちょっと

須永 じゃあ、財務省側が一気に動いた？

山下 そう。でも、その財務省の担当官は、いろんなところを視察して勉強してみたいですね。文科省も興味がなかったわけじゃなくて、文科省のお役人が僕の研究室を訪ねてきて相談を受けたこともありました。それから、財務省の動きより少し前、2004〜2005年にかけて、文科省が学校と学校外の機関の連携について特別研究をやったんですよ。虐待問題が増え、学校は他機関と連携が非常に弱いので、その課題に対する研究でした。その委員に、僕がたまたま入ったので、スクールソーシャルワークを導入したほうがいいんじゃないかと提言したんですね。文科省の人に実際にスクールソーシャルワークを見てもらうために、いっしょにアメリカに行ったこともあります。シカゴ周辺の学校をいくつか訪ねたり、もうひとつのグループはカナダに行って視察しました。そのまどめの提言で、僕がスクールソーシャルワークの導入の必要性を謳ったんですね。

お手伝いをしたんですが、それ以降はいっさい関わらなかつたです。関わりたくなかつた。

その理由は、初年度の15億円で900人ほどをいきなり雇用したんですが、当時、ソーシャルワークを知ってる人はあまりいなかったわけだから、当然めちゃくちゃな雇用の仕方になった。だから心配してただけで、2年目にどうなるかと思ったら、今度は文科省が予算をぐっと削減しちゃったんです。最初は100%国の予算だったんだけど、2年目は3割だけで、残り4割は自治体負担になってしまった。

中村 たった1年間で急変ですね。

山下 そう。評価も何もできない状態で予算を削減したので、2年目は小さい自治体では予算を出せないの、数が減っちゃったんですね。僕は、そのすごくずさんな導入の仕方に腹が立って、関わりなくなつた。ただ、いったん予算は減ったけれど、継続しているうちに再び予算が増えてきて、最近では、ことあるたびにスクールソーシャルワークの名前が出てくるように

なってきました。

数だけ増えても

須永 文科省は来年度も増やす前提で概算要求してますね。

山下 でも、それはちょっと困るなと僕は思ってるんです。というのは、僕が大学の教員になったのは、専門家に傷つけられる人がいるので、子どもに寄り添える専門家を育てようと思ったからだったんですが、急に1万人も増やしたら、ほんとうにどんな人がなっていくかわからないですよ。専門家を導入することで、結局、傷つく子どもたちや親御さんたちが出てくるとしたら、スクールソーシャルワーカーなんていまいほうがいいという話になってしまふ。活動の質を担保できないかたちでの導入は困るなと思ってるわけです。僕たちは、ソーシャルワーカーの倫理綱領^{*3}を

*3 国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワークの定義にもとづいて、2005年に採択された倫理綱領。

山下 スクールソーシャルワーカーには、今の流れに沿いたい人たちが多く入っていて、教育委員会の意向を受けたソーシャルワークというか、そういうことが非常に多いです。いま全国各地で、ソーシャルワーカーが子どもと直接会わないというスタイルが広がっています。なぜそういうことになっているのか、僕にはわからないんですが、ソーシャルワークの理念や方法論とはかけ離れてしまっているんですよ。そんな根本的な問題がすでに起こっています。

須永 根本的に問題がずれていますね。

山下 名古屋市でも常勤職にはしたけれど、元警察官などとチームで動かないとダメなんですね。

中村 そういう意味では、日本スクールソーシャルワーク協会の存在意義がますますあるんじゃないですか？

山下 そうですね。子どもの声を聴くことがほんとう

大事に考えながらやってきたので、そういうものを踏まえないでスクールソーシャルワーカーになる人が増えるのは困りますね。

もうひとつは、数だけ増やすと有償ボランティア化してしまうおそれがあります。いまでも、退職教員だとか、子どもたちと関わってきた人たちが、こづかい程度の少ない収入で活動をしている。それでは、きちんとした位置づけにならず、むしろ形骸化していくのではないかと思いますね。

日本にもスクールソーシャルワーカーが導入されたけれども、確立されたとはまったく思っていません。確立するというのは、ひとつの職業としてちゃんと位置づけられることです。それは、それによって生活ができることだと思うので、生活が成り立ちにくいかたちでの導入は、僕の思いとはかけ離れてるなと思っています。

須永 山下さんだけではなくて、山下さんの周辺の方たちも問題を指摘しているのですよね。

に大事だと、ずっと言い続けながらやってきているのでね。

子どもの最善の利益とは

須永 協会がメンバーを増やしていく時期と、行政の流れは重なってないんですか？

山下 メンバーはあまり増えてないんです。

須永 何人ぐらいですか？

山下 200人ちょっとぐらいです。増やそうとしないこともあるんだけど、あまりかたちだけ増やそうとすると、ここに入れば仕事を紹介してもらえんじやないかなんて考えで参加する人もいる。そうじゃなくて理念や価値観をしっかりと共有できる人たちに入ってほしいという思いもあって、いたずらに増やそうとはしてないんです。一方、初期にカルチャーセンタールで講座を受けた方たちは、いまでもメンバーに

残ってるんですけど、その人たちは子どもへの視点がまったくおれないですよ。

須永 子どもの声を聴くところから？

山下 そうそう。だから、スクールソーシャルワークをやる人たちには、そういうふうになってほしいかな。僕は今後、研修の場をつくって、子どもに寄り添う目線や考え方を伝えたいと思ってます。人が来るかどうかはわからないけど……。

中村 いま、これからスクールソーシャルワーカーになりたい人は、どういうルートをとっていくのがいいのでしょうか。いまは、従来通りの社会福祉士や精神保健福祉士になっているのかと思いますが。

山下 そうですね。それが本流になっていて、今後もそうでしょうね。

中村 そうすると、子どもの、とくに不登校のことな

山下 言葉としてきちんと位置づいたのは、アメリカでのことですね。それまではなんとなくほんやりとして、いろんなことを考えたりしたけれども、僕がソーシャルワークを勉強してよかったのは、自分がいろいろ考えていたことが整理されたことです。

増田 でも、その前から、山下さんご自身が自分を何かの型にはめようとか、抑え込まないでご自分を大切にされてきたこともあるのでしょうか。

須永 土台がすであつた。

山下 そうなんですよ。ソーシャルワークを勉強して初めて、自分はこれを勉強したかったんだと感じました。「ちっちゃい目だけど目がきらきらしてる」と自分で感じたりしていました。すごいそれは幸せな瞬間でしたね。

増田 出会うべくして出会ったみたい。

どをよく理解して養成されているわけではないのではないのでしょうか。

山下 不登校のことは、教科書やテキストにちよこつと書いてあるぐらいですね。ただ、僕は倫理綱領や基本的な価値や理念をきちつと踏まえていけば、不登校に応用できると思っています。僕自身、当初は不登校のことをぜんぜん知らなかったけど、子どもの最善の利益を基盤にしたから、大きなズレもなくてきたんですね。

でも恥ずかしながら最初は、不登校の子に「学校に行きたいんですよ？ 行ったほうがいいよ」みたいなことを言ったことがあつたんです。でも、その後、学校に戻っても、だんだんと元気がなくなって、これはちよつとちがうな、子どもの最善の利益になってないなど感じたんです。最善の利益というベースがあつたから、その後は無理して学校に行くものじゃないという捉え方になつたんだと思います。

須永 それは、やはりアメリカで学ばれたのですか？

中村 引き寄せたというか。

須永 出合いを引きつけるってやつですね。

山下 いつも思うんですけど、チャンスは誰にでもいっぱいあるんだけど、それをつかめるかどうかは、その人にかかっているんだと思います。僕の場合は、ソーシャルワークに出会ったのはすごく大きかった。

不登校は文化をつくってきた

須永 最期に、山下さんから現状について、とくにおっしゃりたいことがあれば。

山下 最近、ひきこもりの活動がわりと活性化してき印象ですね。

須永 ああ、当事者たちの発信ですよ。

山下 そう。あれはいいなと思って。僕は以前からひきこもりや不登校は、ある文化をつくってきたという思いがあるので、一般社会とちがった文化をつくる方向が、ひきこもりにも具体的に見えてきたので、それはとてもいいことだなと思ってます。

一方、不登校に対しては、変わってきた部分と変わらない部分があるんだけど、これから根本的なところを変えていけるかどうかは、予測がつかないですね。けれども、ある意味では転換点に来ているかもしれないですね。だから、不登校は減らないでほしいなと思っています。

須永 (笑)。子どもの数は減ってるので、不登校の数は増えなくても、その割合は増えていくかもしれないですね。

山下 そう。同じ12〜13万人と言っても、以前とは比率がちがいますよね。

須永 ほかに、山下さんが取り組んでこられた修復

◇本プロジェクトにおける用語の取り扱いについて

「不登校」を意味する用語は、長い年月のあいだに、「学校恐怖症 (school phobia)」「登校拒否 (school refusal)」「学校嫌い」「不登校」など、さまざまな用語が使われてきました。立場や人によって、その言葉の使い方や、意味するところが異なります。不登校50年証言プロジェクトでは、統一した用語に整理するのではなく、話し手の文脈に即して使うこととします。

的対話のことなど、まだまだたくさんお聞きしたいところがあるんですが、このあたりで終わりにしたいと思います。

須永、中村、増田 どうもありがとうございました。

本プロジェクトは寄付で運営し、すべての記事が無償で公開しています。ご寄付のほど、よろしくお願いします。

郵便振替口座：00100-6-22077
加入者名：全国不登校新聞社
一口 1000 円／ 3000 円／ 5000 円

不登校 50 年証言プロジェクト <http://futoko50.sblo.jp>

#30 山下英三郎さん

インタビュー日時：2017 年 9 月 18 日

聞き手：須永祐慈、増田良枝、中村国生
場所：山下英三郎さんご自宅（長野県）

写真撮影：中村国生

記事編集：須永祐慈

記事公開日：2017 年 12 月 29 日

編集・発行：全国不登校新聞社
© 2017 Zenkoku Futoko Shimbun sha

東京編集局（関東チーム事務局）
〒114-0021 東京都北区岸町 1-9-19
TEL:03-5963-5526 / FAX:03-5963-5527
E-mail:tokyo@futoko.org

大阪通信局（関西チーム事務局）
TEL:050-5883-0462
E-mail:osaka_c@futoko.org